

尾崎先生を偲んで

商学部 梶 田 建 夫

尾崎先生が亡くなられてからはや1年になろうとしています。

私と尾崎先生との最初の出会いは、先生の本学教授としての採用試験の面接でした。複数人の面接でしたが、結果として尾崎先生が選ばれました。2000年1月の教授会への採用理由の報告書の内容は次のようでした。

『次の理由により、尾崎都司正氏を「経営情報システム論」担当の教授候補者として推薦します。

1. 企業の出身であるが、最近 15 年間は研究職である。
2. 多くの企業の情報システムに関するコンサルティングを行っている。
3. 不確定な状況からの意思決定手法である AHP というものを研究しており、これを経営とか投資に関する意思決定の分野に適用することを行っている。
4. システム工学で学位を得ているが、多くの経営情報関連の研究者と共同研究を行っている。
5. 面接においては、今後の研究への取り組みなどに意欲的であり、教育にも積極的であるとの印象を受けた。』

このように企業に所属しながら、研究業績があるという貴重な人材ということで採用が教授会で決定しました。

その後、学部の講義のみでなく大学院経済経営研究科経営政策専攻でも講義を担当されるようになりました。修士課程では4人の学生の修論指導をされ、後期課程では多数の学生の論文審査を担当されました。

個人的には、私が以前に数値解析を研究で利用しており、その中で固有値というものを利用していた関係で、時々それに関する質問を受けるようになりました。ただ、先生がAHPの手法として固有値を利用されていたのですが、私は特殊な行列の固有値を対象としていましたので、あまり先生の質問に答えることができませんでした。それでも先生は熱心に計算の手法を説明してくださったので、先生のやられたいことは理解できたのですが、話を聞く一方でした。

時々、私の研究室に來られて話をされたり、先生の研究室でパソコンのモニターの前でコーヒーを飲みながら研究について話をすることがありましたが、全く先生の研究の役に立つことはできなかったように思います。

よく先生がメール等で研究の内容を送ってこられて感想を求めてくれましたが、その一部で2009年3月台湾に長期研修に行かれる前のものが残っていました。途中の数式部分は除いてタイトルと結論部分のみですが先生の続けてこられた研究テーマの一部として次に示しておきます。

『不完全な評価行列における欠損値の推定方法

今後の展開予想

- (1) 当初は、循環律で用いた 3 元のマトリックスに固執して、その殻からなかなか脱出できなかった。ANP の循環律問題を完成させてすぐに着想できたのだが、回り道をした。
- (2) 西澤先生の方法はなぜ導出されるのか、Harker の方法と本方法との区別がついていない。
- (3) 現在、数学的な証明に取り組んでいるが、これは台湾での仕事になると思っている。』

このような研究で海外の論文発表を含め多くの研究業績を残されました。これらは今後のこの分野の貴重な資料として残るものと思われます。